

3. 魔法国の物語

各務原市立各務小学校6年

小野木 香奈 川尻 真衣奈 澤井 彩

↓

敦賀市立敦賀北小学校6年

森重 美香 佐田 京香

昔々、ある魔法国に四人の偉大な魔法使いがいた。

一人目は「修復」魔法にすぐれ、二人目は「封印」魔法にすぐれ、三人目は「ガード」魔法にすぐれ、四人目は「攻撃」魔法にすぐれていた。

あるとき、魔王「キンブラ」が現れ、魔法国をめちゃめちゃにしてしまった。そこで四人の偉大な魔法使いは立ち上がり、魔王を封印することにしたが、魔王の力が強すぎて一つの物に封印することができず、十個のある物に封印した。

それから数年後――。

ふとしたことからその十個の物が「黒の森」にとびちってしまい、その数日後、四人の偉大な魔法使いは、重いでんせん病にかかって死んでしまった……。

時は変わって二十二世紀、魔法国は、魔法使いの子供が魔王をたおしてもとどおりになり、ここから魔法国の少女と三人の仲間の冒険ストーリーが始まる。

少女の名前は桜岡柚（さくらおかゆず）。本人は知らないが、はるか昔に活やくした偉大な魔法使いの生まれ変わりだ。

ある日、おさななじみの碧（あおい）つばさと学校の帰り道に、おしゃべりをしていた。

「ねー、つばさ、今日もうち来るでしょ！ 今日、おばあちゃんがあの話しするんだって」

と、柚はつばさをさそった。

「ああ、あの古い昔話ね」

「ねえ、早く行こー」

二人はほうきに乗って、おばあちゃん家へ向かった。

「あっ、何か光った！」

つばさが何かを見つけた。

二人が近づくと、キラキラ光った四つ葉があった。

「なんで光ってるんだ？」

つばさが不思議そうに言うと、

「なんか宝石がうめこまれてるよ」

と、柚が見つけた。

二人は帰って、おばあちゃんに聞いてみることにした。

この四つ葉が、冒険の始まりになるのだ。

「ただいま！ おばあちゃん」

「袖や、おかえり。つばさくんもいらっしやい」

おばあちゃんが目を細めながら二人を迎えた。

「ねえ、なんか見つけたんだけど。見て」

袖がおばあちゃんにさし出した。

「こ、これは……！」

おばあちゃんは、おどろいてあの昔話を始めた……。

「え～～、これは魔王を封印した一つなんだ」

「じゃあ、他のあと九個は、どこにあるんだ？」

二人は、興奮して聞いた。

「魔法国は、五つの国に分かれていることを知っておるかな。とびちったのは、黒の森だが五つの町にも転がっているかもしれない。それを袖達が見つかるんじゃ。まず、町に行ってから黒の森に行くといい。二人で探すのは大変だから、町であと二人くらい仲間を見つけて行くといい。このかばんを持っていきなさい。それと……」

ねこのヒメがすりよってきた。

「ヒメ達もいずれ役に立つから、つれていったらどうかね」

おばあちゃんが言った。

「賛成！ つばさもだよね？」

「うん、そうだな」

「それでは、気を付けて行ってくるんだよ、いろいろ大変だろうけどがんばってきてね」

おばあちゃんは笑顔で二人を見送り、二人は元気よく町へ向かって歩き出した。

「とりあえずとなり町の『フローバルタウン』に行こうよ」

と、袖が提案した。

これが町の略図だ。

(手書き図) ※省略

二人はほうきに乗って「フローバルタウン」に向かった。

「そういえば、おばあちゃんからもらったかばんの中身って、なに入ってるんだっけ？
見てみようよ！」

袖がバックを探していると、小さなかわいい箱が入っていて、この前見つけた四つ葉がはめ込んであった。

「この箱に見つけた物をはめ込んでいくんだね」

「この広場も探してみよう」

『キラキラ見つかるぞめがね』を使おう。ちょっとでも光る物なら、うまっても見つけることができるんだ！」

つばさはめがねをかけた。

「あっ、なんかあそこで光った」

二人は走って、光っている場所へ行った。

「どうしちゃったの？ つばさ、固まってるよ」

柚は不思議そうに光っている物を見た。

「えー、これ、ビールびんのふたじゃん、まちがえちゃったね」

もう一度きよろきよろ、二人は見わたした。そしてつばさが叫んだ。

「あっ、なんか広場のまん中に光ってる物があるぞ」

二人は今度こそ、と思って走っていった。

「これは星の宝石！ 二個目発見だ！」

二人は喜び合った。

「とりあえず二個目が見つかったから、次の町に行くぞ」

二人は次の町ミラクルタウンに向かった。

ビューン……

「ここでも見つかるかな」

柚が何かを取り出した。

「全然場所が分からないから、これをつかおう！」

ジャツジャツジャジャーン

「宝石の方角絶対分かるぞ方位じしゃく」

ぐるぐる……柚は方位じしゃくを使った。

ぐ～るぐ～る……ピコーン

「あっ、はりが向いた。こっちだ」

「こっちを右よ」

「次はこっちを左」

二人は、はりのむく方角の方に走った。

「もうすぐかも」

ドカッ

何かにぶつかった。

「あっ、あの一、ぶつかっちゃってすみません」

柚があやまった。

「わたしこそぶつかっちゃって、ごめんね」

すると、方位じしゃくが光った。

この方位じしゃくは見つかりと光るのだ。

ピカッ

とつ然、ぶつかった人のかばんが光り出したのだ。

「これ、朝見つけたハート型の石だ。どうしたのかなあ」

と、ぶつかった人がかばんの中をみて首をかしげた。

「これ今朝、学校に行く時に落ちててきれいだったから拾ったの……」

「その石って、宝石がうめこまれてねーか？」

「えっと。あっ、うん、うめこまれてるよ」

「やっ、やったー。三個目、見つけた」

柚たちは、昔話やこれが魔王を封印した一つだということや、それを自分たちが集めているということをその子に話した。

「それを全部集めるなんて大変だね。わたしでもよければ、手伝わせてくれないかなあ」

その子は、目をかがやかせて言った。

「喜んで！一緒に探してくれる人を探そうと思ってたの！」

二人は喜んだ。

「自己紹介がおくれてごめんなさい。わたしの名前は秋月愛花。よろしくね」

「みんなでがんばろうね」

「うん。がんばろっ」

「ところでその石って、一人で見つけたのか？」

と、つばさが聞いた。

「ちがうよ。晶くんと見つけたの。赤沢晶くんと言って、わたしのクラスメイトなの。晶くんなら一緒に探すの手伝ってくれるかも！」

三人は、晶の家へ向かった。

かくかくしかじか……。みんなで晶に説明した。

「へー。封印した石を集めてるのか。すげーな。それになんか楽しそうだな」

「私も二人と一緒にこの石を探しに行くんだけど、晶くんも一緒に行かない？」

愛花がさそうと、晶は、

「えっ、おれも行っていいのかあ！」

と、喜んだ。

(意外と子供っぽいんだなあ)

と、柚がクスッと笑った。つばさも、

(あっ、柚も思ったんだ。それにあいつ、背ちっこいな)と思った。

「で、いつここを出発するんだ？」

と、晶が聞いた。

「あっ、あしたの朝だけど」

「そっか。じゃあすぐ準備しなきゃな。もう夕方だし」

「ねえ、じゃあ柚ちゃん。わたしの家に泊まってよ。つばさくんは、晶くんの所に泊まらせてもらったら」

と、愛花が提案した。

「ありがとう。じゃあ泊まらせてもらうね。それと、私のことは柚でいいよ」

「あっ、じゃあわたしも愛花でいいよ」

二人はすっかり仲良くなった。

「じゃあ、明日の朝、晶くんの家の前に集合しようよ」

と、柚はみんなに言った。

柚たちは、今晚は準備をしたり休んだりし、明日の朝一番に出発する事にした。

チュンチュン……

「急げー！」

だっだっだっ、と柚が勢いよく走り、愛花が後を追いかける。

二人は、晶の家に向かって走っていた。

うで時計のはりが、もう七時をさしている。

「もー、近道とかないの？ てゆーか知らないの？ 愛花！」

柚と愛花は近道を通っていくことにした。

「おーい、速くこーい！ ていうか。何でそこ通って来てんだよ」

と、晶がさげんだ。

「ふつうに来た方が速いんじゃないのか？」

と、つばさが笑った。

四人はほうきに乗って次の町に向かった。

「そういえばね、わたしこんなまほうもできるんだよ～～！」

と、愛花が得意そうに言うと、晶があわててとめた。

「いでよ！ ドラゴ～ン」

ゴーツツ

愛花のほうきの下に大きなドラゴンが出てきたのだ。

「キャッ、なっなに!？」

柚がびっくりしてほうきから落ちそうに……。

愛花が手を伸ばしたが、とどかない！

ガシツツ

ギリギリのところをつばさが助けてくれた。

「ふう。危ない。愛花もちゃんと考えて出せよ」

「大丈夫か？」

「うっ、うん。柚ごめんね」

「ううん。それにしてもこんなまほうつかえるなんて愛花すごいね！」

柚は感心していった。

「あとね小さいけど爆発するドラゴンも出せるの。出そうか？」

三人はあわてて愛花を止めた。

「こっ、この魔法は敵とかをたおすときとかに使ってねっ！」

と、柚がはげますように言った。

「あっ、ほらほら次の町、魔法国の中央の町セントラルタウンが見えてきたよ！」

ほうきをとばして町におりた。

つくと、つばさが

「わー、やっぱ町だな、ここは」

と、キョロキョロとあたりを見わたした。

「とりあえず、女王様のところに行かない？」

と、柚が提案し、四人は女王様のいるお城に向かって歩いた。

「うひゃーっ。ここがお城！」

「すっげーな」

お城の前まで来ると、門番がいた。

「なんだそこのあやしいやつら。ここは遊び場じゃないんだぞ」

「やっ、あの、わたし達は別にあやしい物ではないんです。そのっ、えーと……」

柚がしどろもどろで言った。

「おまえ達おやめなさい」

威厳のある声に、門番たちがふり返った。ギ〜と音をたてて門が開き、中からこの国の女王様が出てきた。

「よくきたわね。あなたたちの事は聞きました。さあっ、中に入りなさい」

と、かん高い声がひびいた。

(これが女王様！ なっ、なんかすごい)

四人は城の中に入っていった。

「うっひゃー、中もきれい」

と、愛花がはしゃいで言った。

「こら、愛花、はしゃぎすぎだって。すいません、女王様」

晶が頭を下げた。

「いいえ。いいのよ。わたしにぎやかな方が好きなの。さあっ、入って」

女王様は、ドアの向こうをさした。

「オホホホホッ、なにきん張しているの？ それよりいま集めている宝石のことについて教えてくれないかしら？」

と、女王様はあでやかに笑って言った。

四人は、女王様に宝石について話した。

「よく分かりました。そういえばわたしのところにも、もみじ型のものがとんできたわ。ほうびとしておまえ達にわたします。がんばって行って来てくださいね」

女王様から、もみじ型の宝石をもらった。

「ありがとうございます。女王様！」

みんなは礼を言って、女王様の部屋から出ていった。

「やったね。四個目ゲット！」

「あと六個だな」

「やっぱり女王様のところに来てよかったね」

「よしっ、次の町に行くぞ」

四人達は、次の町〈マジカルタウン〉に向かっていった。

「ここがマジカルタウン。きれいー」

「かわいいお店がいっぱい」

女子二人はついたとたん、はしゃぎまわっていた。マジカルタウンは、そこらじゅうの人がマジックをしていたり、人が通ると花がさいたりと、とにかく不思議な町だった。

「ちょっとお前ら、はしゃぎすぎ！」

「そうだぞ。晶の言うとおりだ。目的を忘れるなよ！」

「じゃあ、ここのお店だけ。お願い」

柚と愛花は楽しそうにお店に入っていき、つばさと晶はちょっとふきげんそうに歩いていった。

「そこらへんブラブラ歩いて、宝石探ししようぜ」

「なあ、つばさ。このリュックの中身の説明してくんない？」

つばさは晶にリュックの中身を説明しはじめた。そのころ柚たち二人は、手にたくさん荷物をさげていた。

「このまま勢いで買ってっちゃったら、お金なくなっちゃうかも」

「大丈夫。だってわたしまだ三万ベリーもあるもん！」

と、愛花がじまんげに言った。

「わたし一万ベリーしかないよう」

「まっ、大丈夫だよ。それより晶くんたちのとこ行こっ、ゆず」

プルルルル

柚はつばさのけい帯に電話した。

「もしもしつばさ、今どこにいる？」

「今、大きな映画館ほいところの前のベンチにすわってる」

「買い物おわたんだけど、わたしたちどうやって宝石さがせばいい？」

「今おれらがいる映画館みたいなのところって、この町の中心なんだから。だから柚たちはそこから西をさがして、おれらは東をさがすっていうのはどう？」

「あっそれ、いいかも。じゃあそうしよ」

こうして四人はいろいろな場所を探しはじめた。

「愛花、まずこれを使ってさがそう。『キラキラ見つかるぞめがね』」

「晶、これを使うぞ。『宝石の方角絶対分かるぞ方位じしゃく』」

四人はリュックの中に入っているあらゆるものを使って、そこらじゅうを探しまわった。そして午後四時、あれから五時間以上たった。柚たちは近くの店に入って休んだ。

「あれから五時間もたってるのに見つからないなんて、やっぱりここにはないのかな」

愛花はちょっとあきらめモードでいった。

「そうかも、もう方法もないし。ほとんど探しきったし、どこにあるかなあ」

「とりあえず、つばさくんたちに電話してみよ、柚」

柚はつばさに電話をかけた。

「もしもしつばさ。宝石あった？」

「ううん、まったく。柚、今どこ？」

「マジックフードってお店の中で休んでるの」

「えっ、おれらも今そこにいるよ。二階にあがってすぐ右行ったとこのテーブル」

柚は電話をきいて、愛花をつれて二階にあがっていった。

みんなはいすにすわって話しはじめた。

「方法全部使ってもないなんて、やっぱりここにはないと思うよ」

「う〜んそうかも。おばあちゃんも、絶対あるとはかぎらないって言ってたし」

女子二人はけっこうあきらめモードになっていた。

「今日はもうおそいしどっかにとまって、朝一通り探して黒の森に行くことにしようか」

三人はつばさの言うことに賛成して、朝行くことにした。

チュンチュン……。

「よしっ、さがすぞ！」

みんな、昨日のつかれもとれて元気になっていた。

「じゃあ、次は男女で分かれよっか」

柚の意見でペアにすることにした。ペアは、柚とつばさチームと晶と愛花チームにな

った。そしてまた、町の中を探しまわった。一通り探してみても見つからないみたいだった。

「そろそろ晶たちとごうりゅうするか？」

柚は愛花に電話した。

「あ、柚、もう宝石ない！」

「わたしたちの方もない。今、どこにいるの？」

柚が聞いた。

「今？ 広場の近くだよ」

「じゃあ、そこにいくから、待ってて」

柚とつばさは、愛花と晶のところに向かって走って行った。

「ここはもう絶対ない」

柚が言った。

「そうだな。やっぱりもう黒の森に行く？」

つばさがつかれきった声で言った。

「ここで時間くってるひまないから、黒の森に行こーぜ」

みんなが賛成したので、黒の森に行くことにした。

「いよいよ黒の森だね。ここからはきけんがいっぱいだから気をつけようね」

四人は黒の森に入って行った……。

「くすっ、くすっ、バカな魔法使い達ね。黒の森にはいったらどうなるか分かってるのかしら。わたし達のえものになるとも知らずに……」

「エルフ……あのおバカさん達の後をつけていなさい。さあどうなるかしらね。アハハハハ」

「今、なんか聞こえたような」

柚が首をかしげて言った。

「そう？ わたしは何にも聞こえなかったよ」

「そ、そっか。空耳だったのかな？」

柚と愛花は話しながらもくもくと歩いていた。☆

ピカッ！

「なんだ？」

「とにかく行ってみましょうよ」

柚たちは、光を放っている方向に向かって走りだした。

「あっ！ 宝石だ！」

「これで、五つ目だ！」

「じゃあ、箱に入れるよ」

柚が箱に入れようとしたとき、愛花がひきとめた。

「待って、その宝石なんか変な形だよ」

「え？ あっ！ 本当だ！ 形がぐにゃぐにゃ変化してる！」

「どうすればいいんだ！」

「とりあえず、はなれよう」

柚たちがはなれようとした、そのとき。

グワァァ

急に、宝石がこわいモンスターに変身した。

「きゃー！ どうなってるの！」

愛花が悲めいをあげたとき、モンスターが話した。

「その宝石をわたせ！」

「あっ、あんたなんかになんかわたすもんですか！」

「おいっ、そんな事言っていないでさっさとにげるぞ！」

「うっ、うん！」

「にがすものか！」

モンスターからにげていると、愛花が石につまずいて転んでしまった。

「きゃ！ いっ、痛っーたい！」

「だいじょうぶか、愛花！ あっ！」

「フハハハ！ これでおしまいだ！」

「きゃー！」

パァァ

急に、愛花がつまずいた石が光りだした。

「あっ、この石、もしかして宝石だったの！」

「なっ、何い！」

ズサァァ

宝石がモンスターの体をつらぬいた。すると……

「おっ、女の人？」

「くっ！ 今日はこれで退散してやる！ ありがたく思え！」

その人がでていったとたん、空が明るくなった。

「なんだか分からないけど、勝ったのか……？」

「まっ、まっ、とにかく宝石を手に入れたみたいね」

「今度は、おうかん型だわ！」

柚は、箱にその宝石を入れた。

「よーし！ 五つ目ゲット！」

「ねえ、ねえ、この調子でほかにも見つかるかもしれないし、もっと奥まで行かない？」

「賛成！ あっ、愛花、膝すりむいてるみたいだし、ばんそうこうはっとうようよ。」

そう言って、柚は救急箱からばんそうこうを取りだしてひざにはった。

「ありがとう。じゃあ、行こうか！」

柚たちは、奥へ、奥へと進んでいった。

そして、二時間後……

「二時間で宝石を二個も手に入れてるなんて、すごいじゃん。おれたち。」

二時間歩いているうちに二個も見つけたのだった。

「もう、ここにはないみたいだし、マジカルタウンに戻ろうよ」

「ああ、そうだな」

柚たちがマジカルタウンに帰ると、晶が、

「またここを探そうぜ」

と言ったが、柚と愛花が、

「ここは探したけれど見つからなかったから、おばあちゃんのところへ戻ろう」

と、提案した。

柚たちはほうきに乗って、おばあちゃんのいる町に向かった。

ビューン……

「おばあちゃん」

「おやおや、柚、もう全部見つけてきたのかい」

おばあちゃんは、ゆっくり出てきて言った。

「ううん、そうじゃなくて、四つの町と黒の森に行ったけど、宝石が全部見つからなかったの」

「それじゃあ、もしや……無の城にあるのかもしれない」

「無の城？ 何、それ？」

おばあちゃんは、目をすろどくして話した。

「わしもよく知らんが、なんでも、全てを無に変えてしまう力があるといわれている所じゃ」

「そんなところに行かなきゃならないの？」

「でも、とにかく、行かなきゃいけないみたいだから、行こう！」

柚たちが、行こうとしたとき、おばあちゃんが呼び止めた。

「柚、ちょっと待ちなさい」

「どうしたの、おばあちゃん」

「ちょっとな……ほら、ヒメ、いや女神様」

「はい」

サー、ピカッ

「キャー、まぶしい」

光の中からだれかがでてきた。

「柚、つばさ、愛花、晶。ここまでよくがんばりましたね」

「あなたはだれなの」

「女神様じゃよ」

「いままでかくしてごめんなさい。少し理由があって身をかかしていたの。一つだけ、わたしは、宝石を持っていたの、あなたたちに渡すわね。あと、このつえも受け取って」

「このつえは、なんですか」

「このつえは、あなたたちに、ねむる力を引き出してくれるわ」

「その力って何ですか？」

「そういえば、話してなかったわね。あなたたち四人は、昔、魔王を封印した、偉大な魔法使いの生まれ変わりなのよ」

「え——？」

四人は、同時におどろきの声をあげた。

「その力は、それぞれ、柚は、『封印』つばさは、『修復』愛花は、『ガード』晶は、『攻

撃』という力が、宿されているのよ」

「わたしたちに、そんな力があつたなんて！」

「わたしは、あなたたちについていってあげたいけど、行けないからがんばって宝石を集めてね」

「はいっ、分かりました。女神様。では、行ってまいります」

「たのみましたよ」

こうして袖たちは無の城に行くことになった。

さっそく、無の城へゴー！

ビューン……

「ここが無の城……？」

「そうみたい。だけど、きれいな場所だよ？」

「城が見えないよ」

「もっと遠くにあるんじゃない？」

袖たちが話していると電話がなった……。

プルルルル

「だれだろう？」

ピッ

「もしもし」

「わしじゃ！」

おばあちゃんは、あわてているようで声が高くなっていた。

「おばあちゃん、どうしたの？」

「それがのう、今、調べて分かったことが、二つあるんじゃ」

「えっ！ そうなの、教えて」

「まず、宝石の場所なんじゃが、城の最上階にあるようなんじゃ」

「最上階か、行けるかなあ」

「城はあるか？」

急におばあちゃんが言った。

「えっ、見えないだけだと思うけど、今はないよ」

「見えないか……運が悪かったな、本来ならば、おぬしたちが立っている場所の目の前に建っているはずなんじゃが……」

「えっ、うそ、じゃあ、見える日と見えない日があるってこと？」

「そういうことじゃ」

「じゃあ、どうにかならないの？」

「ならないこともないんじゃが……」

「なんなの、教えて」

「それはドラゴンに雨を降らせてもらうことなんじゃがのう……ドラゴンなんて……」

「それなら、大じょうぶ、愛花が、呼びだせるから」

「なんじゃと。それならいいんじゃ。じゃあがんばってくれ」

プツッピーピーピー

「切れちゃった」

「じゃあドラゴンを呼び出すね。いでよドラゴーン」

ゴーッ

愛花の声と共にドラゴンが現れた。

「じゃあドラゴン、雨をふらせて」

ゴーッ、ゴーッ

ポウポツ……ザァー

さっきまで晴れていた空から雨がふってきた。

「あっ！ みて！ お城よ！」

「本当だ！ よし！ のりこむぞ！」

柚たちはどんどんおくへと進んで行きついに最上階の部屋のとびらの前まで来ていた。

「今回は楽勝だったな。行くぞ！」

「ちょっとまってワナがしかけてあるかもしれないわよ！」

そう話していると、急にすごい音がきこえた。

ゾオオン

「なっ、なんな……？」

「われはこの城を守るもの。ここを通りたいようだな。心がよごれていないか、見せてもらうぞ」

「えっ、どういうこと！」

サァァ

「お前たちの心はよごれていないようだな。ここを通そう」

そう言うと、音もおさまった。

「なんだったんだ？ 今のは」

「まあ行きましょう」

カチャ、ギィィィ

「わぁほこりだらけ！」

「これじゃ宝石も見つけれないわ！ そうじしましょ」

そうして柚たちはそうじすることになった。

二時間後……。

「ふー！ そうじしおわったわね。ところでだれか宝石見つけてない？」

「あっ！ これかな花の形……」

「それよ！ じゃあ宝石も見つかったし帰りましょ」

「ちょっとまって！ 写真があるよ？ 光ってるし、持っていったかない？」

「うん。そうだな」

柚たちは九つの宝石を持って城を出た。すると……

「ウフフフ。久しぶりね」

「あなたは前の……」

「さあ、宝石をわたしなさい！」

「いっ、いやよ！」

「あがいてもむだよ。カづくでとってあげる」

フワァ

「あっ宝石がっ！」

「わたしぐらいになれば簡単にこれぐらいのことができるのよ」

「さてとそろそろ帰りましょっと」

パァァァ。

「えっ！この光はあの時の……」

ズサァァ

九つの宝石がエルフの体をつらぬきエルフは消えてしまった……。

「わたしたち、この宝石に助けられたの？」

「そうみたいだな」

四人はほっとして息をついた。しかし……、

「あれ見て。だれかが歩いてくる」

「だれだろう」

「あの役立たずめ。さっそくだけど、あなたたちの持っている宝石をわたしなさい」

「だからいやだって言っているでしょ。あなただれよ」

柚がその人に聞いた。

「名乗る必要はないわよ」

「えっ」

「だってあなたたちどうせ死ぬんだから。かくごしなさい」

「そういえば女神様からもらったつえを使おうよ」

「そうだな」

「それじゃあ、おれから。トルネードサンダー」

「あなたたちの攻撃なんて通用しないわ」

しかし、晶の攻撃ははねかえされた。

「くそっ」

「今度はこっちからいくわよ。ハァッ」

「みんなさがって。いでよシールド」

「みんな大じょうぶ」

「あなたのシールドも、こわそうと思えばこわせるのよ」

バシッ。愛花のシールドはこわされてしまった。

「あっシールドが」

「じゃあ、だれから行きましょうか……じゃあ、あなた宝石を持っている女の子」

「えっあたし？」

「ハァッ」

「キャー……あれ？ なんともなっていないよ？ あっ、写真が」

写真が柚を守っている。

「そ、その写真は……そうだったわ。あたしはあの子の病気を治そうと思って魔王を復活させようとしたのに、いつのまにか自分の欲望のために復活させようとして……この宝石はあなたたちにわたすわ」

「あ、ありがとう」

「全部宝石が集まったけど、この宝石半分ないみたいだ」

「あっ、見て！ 写真が光ってるよ」

「あっ、写真の形が宝石の半分になっちゃった」

「つばさの力は修復だったから直せるんじゃないの」

「おう、まかせとけ。修復！」

「あっ、どんどん直ってく！」

二つに分かれた宝石はみるみるうちに一つにもどっていった。

「柚、あとはたのんだぜ」

「まかせて、いくよ！」

柚は目をして念じ、とうとう宝石を封印することが出来た。

そして、柚たちは魔王と戦うはずだったが、あまりに偉大すぎてその運命は変わった。

柚たちは、前の魔法使いよりも偉大な魔法使いとして未来に語り継がれた。